

又従来外國船の購入は本邦船舶を供給する最重要のものにして實に購入船は船數に於て内地造船數に及ばざるも總噸數に於ては毎年需要の三分の二を占めたり然るに開戦後は内外の形勢一變し大正四年より著しく輸出入の割合を變じ大正五年度に於ては遂に輸出船數十二隻、總噸數三萬九千四百噸に達し本年度は更に此勢著しからむとす。唯最近船舶管理令の出づるあり貨船に制限を加へたるを以て大に形勢を變ずるに至らむ。

最後に本邦船中毎年の減失數を調査するに明治三十五年より四十三年迄五箇年間は平均二百六隻（各種船舶を合計す）此總噸數二萬五千九百九十一噸其の百分比、船數に於て二分九厘、噸數に於て一分七厘なりき。然るに開戦後は海運の好況に連れ航海度數及び船數の増加其他に依り其割合を増加し大正四年に於ては船數に於て一分四厘なるも噸數に於て一分九厘六毛となり更に大正五年に入りては獨艇の爲に擊沈せられ及び行衝不明船等續出し爲に船數百五十七隻、總噸數七萬七千三百七十九噸、其百分率、船數に於て一分三厘噸數に於て三分五厘三毛となりたり。大正六年に於ては更に著しかるべしと信す而して本邦減失船數は従來の統計に依れば漸増の傾あり之には幾多研究すべき問題を含むべしと雖も暫く之を省く。而して戰時特別の状態にある今日の事情は以て標準となすを得ずと雖も其大勢を遠觀するに平年一箇年の減失噸數は約一分八厘と見て大差なかるべし。右現在船舶に要する船員數の研究は既に第二章第一の三に於て詳説したるを以て今又贅せず。

第四 本邦造船能力と將來船舶の増加

前段に於て本邦船に關する一通りの研究を終りたりと雖も開戦以來世界的船腹缺乏の聲に激成せられ我國造船業は急速の進歩を遂げ戦前五萬噸なりし造船能力は一躍十二萬噸となり更に四十萬噸に躍進したり唯造船材料の供給問題及び船舶管理令發布等の爲め將來の形勢は如何に變ずべきや遽に逆睹するを得ざる状態に立至りしと雖も戦前に比し著しく變化を來しつゝあるは否むべからず。されば少くとも大體の形勢を察し豫め之に備ふる所なかるべからず。

(一) 現在本邦造船能力

イ、現在造船所

(第七表)

(大正六年九月調)

千噸以上の船舶を建造し得べき造船所四十二箇所、其造船噸數、百十三臺、尙本年中増設の見込あるもの二十四臺、		現在造船廠	本年内に見込	造船所名	現在造船廠	本年内に見込
石川島造船船	四	一	一	藤水田造船船	五	〇
漢野造船船	六	二	一	原田造船船	二	〇
浦賀造船船	二	一	一	大阪鐵工造船船	七	〇
島羽造船船	一	一	一	木津川造船船	一	〇
今村造船船	一	二	二	大正造船船	一	〇
				吉備造船船	二	〇